



アジアの星物語

海部宣男 監修 柿田紀子/川本光子 邦訳

読み物
お薦め度
4
☆☆☆☆★

「アジアの星」国際編集委員会編, 万葉舎, 定価1,900円+税, 331頁

表紙絵に始まり、挿絵を見ていくと、その地域ごとの個性的な絵に、お話もさまざまな星の物語だろうという想像を膨らませる。ギリシャ神話の星座と、中国の星座とは趣が違っていることは知っていたが、ほかにも星座の物語があることを知ったのは、八重山博物館（石垣市）で出会った『星図』を見たときだった。その際、八重山博物館の館長さんが、種まきの頃のスバル（むりかぶし）のでる方向を、右手で示されたとき、ここでは星が近いのだと思った。（『アジアの星物語』でも、「むりかぶしゆんた 沖縄地方」の伝説で紹介されている）そんなことを思い出しながら、この本を読み進めた。

口絵に、『アジアの星物語』が生まれた地域の簡単な地図があり「東アジアと東南アジア、さらに太平洋諸島の13の国・地域の協同で、星と宇宙に関する68の神話・伝説を集めました」と、この本についての紹介が示されており、目次から大項目を記すと、「まえがき：アジアの星と宇宙にまつわる神話・伝説への招待、パートI：人々に愛された星と宇宙の神話・伝説、パートII：太陽、月、星、宇宙と人々、解説：古代アジアの宇宙観と天文学、1. 古代インドの宇宙観と天文学、2. 古代中国の宇宙観と天文学、3. 太平洋諸島地域の宇宙観と天文学、4. 東アジア地域の宇宙観と神話・伝説の流れ」で、解説は、天文学が、その地域でどのように生まれたかを知る手がかりとなっている。この本を読み聞かせるとき、教師や、星の解説員等の役に立つだろう。

プレアデススバルーむりかぶしのお話が多く取られているが、もともとお話が多いのか、それとも、生活に必要な星として物語が残されてきたのか、興味のわくところである。また、ここに載せられている伝説や神話を読みながら、その話の生まれた地域が目につく。たとえば、「うぬぼれやの弓の名手 モンゴル」(p. 178) の話を読みながら、どこまでも草原が続き、太陽はいつまでも追いかけてくるように見えていて、時には早魃で困らせられたらうこと。また、海にこぎ出す人々にとってのプレアデスは目安であり、身近な存在であったらう (p. 158, p. 226) 等と、そのお話が生まれた背景に思いをはせながら読んだ。なかには、その人々の地域に起きた災害や、辛い生活を、星に託して残し続けたであろうお話もあるように思う。それほどに、宇宙、星、太陽、月は必要で、身近な存在だったことを教えてくれる。現在はどうか。 「月と星の祭りと文化」(pp. 262-272) は、災いが起こらないように、または忘れないように、人々は祭りを作り出して、楽しみながらも厄払いを願い祈ったらうことを知る。

2011年3月11日の東北の夜は満天の星空であったことを知る（仙台市天文台HP「星空と共に」）。このとき、たくさんの悲しいお星さまが生まれたことが伝説となって、忘れないで残されていくべきだろうこともこの本は教えてくれたように思う。

伊藤節子（元 国立天文台）